

---

# 過去と赤提灯と雑談と

鷺嶺綺羅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

過去と赤提灯と雑談と

### 【Zコード】

Z7986Z

### 【作者名】

鷹嶺綺羅

### 【あらすじ】

水瀬にとつては姉ともいべき存在、饗庭樟葉。彼女とその悪友、ナターシャとの酒飲み話です。

### 饗庭樟葉の回想より

水瀬悠理と初めてと出会ったのは、確か小学校三年か四年の頃、長野に遊びに行つた時だつたと覚えている。

目のクリクリした可愛らしい女の子。といつのが第一印象だった。子供は私と悠理だけ。大人は酒の席。

となると、悠理の面倒は私が見ることになる。

当時、妹が欲しかつた私は、念願が叶つたような気がして、遙香様や母から、「お姉さん」と呼ばれるのが何よりうれしくて、それはお姉さん風ふかせもした。

ただ、私は私なりに一生懸命、いいお姉さんたろうとしただけなのだ。

しらなかつたとはいえ、温泉の女風呂へ悠理を連れていき、大騒ぎになつたことなど、思い出したくもないが……。

その悠理と再会したのは、よりに moyつて戦場と化した、かつて共に遊んだ地。

共に騎士として、だ。

私の後をついてくるだけだつた悠理は、いつのまにか、私が頼りとするほど強くなつていた。

逞しく、とか、凜々しく、とかいう言葉は、全く縁がない。見てくれば、昔のまま成長したこと示していた。

ただ、外見とは裏腹に、悠理は「強く」なつていた。

それが、「お姉さん」としては、うれしくもあり、さみしくもあり……。

悠理から、「友達」という言葉を初めて聞いたのは、再会してからじがらくしてのこと。

英國國教神聖騎士団と共同戦線をとつてゐる最中のことだつた。いつも司令部の隅でぼつんとしていた悠理が、気がつくといない。

どこに行つていたと尋ねると、

友達の所

と言ひ。

戦場のまつただ中で、友達といつ言葉が出てきたことに、正直驚いたが、その友達が、あのルシフェル・ナナリだといつことに、さらに驚くことになつた。

ルシフェル・ナナリ

前評判が強すぎるせいか、魔法騎士としてしか、最初は見ることが出来なかつたが、この子もかなり浮世離れしているというか、世に慣れていない、不器用な子、つまり、悠理の同類だと氣づくのに、それほど時間はかからなかつた。

とにかく、コミュニケーションをとるのが大変。

会話のキヤツチボールがまるで出来ない、話しかけても、必要最低限のこと以外を話すことをしてない、いや、出来ないので。

何を話していいのか、いつも困ってしまう。

当然、話していくも面白みにかけ、いつしか会話の中から外れている。

悠理もそうだ。

だからだろう、組織の中では孤立していた。

ま、同じ年だし、悪い話ではない。程度にしか、当時の私たちは誰も考えていなかつた。

まだ、悠理が大規模な戦いに参加していなかつたせいもある。

悠理が、当時から歐州最強レベルと言われていたルシフェル・ナナリの背中を任せても大丈夫なほどの実力者だと、私ですら知らな

かつたのだから　　。

そして、一人はいつしか、完全に単なる騎士から兵器へと、周囲の扱いをさらりと悪化させ、孤立を深めていった。

二人が友達として、いや、同類同士として一緒にいることが多いなると、自然と、一人の恋人説が軍内部に流れ出した。

誰がいうともなく、だが、それが、好奇心でもあり、二人という特異な存在同士へのせめてもの同情でもあつたのかもしれない。初めて聞いた時、私はルシフェルが悪趣味だと、悠理が背伸びしすぎだと、確かに困惑した。

それは、弟に彼女が出来た。と聞かされた姉の心境だと、そう思つていて。

つまり、一抹の寂しさだつた。

その悠理が、ルシフェルのことでの相談に来る回数が多くなったのは、ルシフェルが、やつと悠理が男の子だと知つてからだった。

ルシフェルの誕生日に何かプレゼントをしたいとか、

ルシフェルが口を聞いてくれなくなつたとか、

相談内容は、ごくささいなこと。

だが、悠理にしては大問題なのかもしね。

この子も、友達づきあいなんてしたことがないのだから　　。

最初は、姉のつもりで。

そして、慣れてくると暇つぶしを兼ねて。

戦争を忘れる意味で、相談に乗つてゐるつもりで、さんざん一人をネタに楽しんだのは、我々女性騎士達だ。

ルシフェルがどうこうより、むしろ自分ならば、の立場で悠理にあれこれ吹き込んだものだ。

悠理は悠理で、一々それを鵜呑みにして、ルシフェルに散々な目

にあわされ、泣きながら私の所へ来たのは一度や一度ではない。自分が面倒くさかつたからとはいへ、洗濯位して欲しいといって、それが彼女の希望でもあると勘違いした悠理が、彼女の下着まで洗濯し、一週間近く、私たちの口添えが有るまで口一つ聞いてもられなくなつたのは、いまでも悪いことをしたと思つてはいる。

東京某所ガード下

「ま、あんたと飲むのは久しぶりね」

「苦労したわよ？ 取り巻き巻くの」

「でも、もう少しまトモなところで飲めないの？」

「何いつてるのよ？ 日本酒は、こうこうとこりで、コップで飲むからおいしいんじやない！ ね？ そりでしょ？ おじさん

「へ？ へえ…まあ」

「ほらあ！」

勝ち誇った顔をする田の前の女を無視するより、田の前でおでんを皿に盛つている屋台の主に、楠葉は言った。

「おじさん。ごめんなさいね？ 騒がしいの連れてきて」

「いえいえ。お嬢！ いや、先々代からお世話になつてているんですから！」

「クスッ。ありがと。でも、おじさんも、いい加減店を持てばいいのに」

「いやあ……」

捻り鉢巻の年老いた男は、頭をかきながら言った。

「美学、みたいなもんですねわ」

「美学？」

「ま、箸にもかからねえクズみてえな屋台の戯言ですけど。でもね？ こうして屋台を引いて、店広げて、来るお客様と話す。身よりもねえし、何より、こんな年になると、これしか、たつたこれだけが楽しみでねえ。そんな俺が、店持ちなんて格になると、何かこ

う、大切な何かが変わっちゃう。何十年やつてたことが、ね。俺あ、それが怖いんですわ

はい、ちくわぶ。と主が楠葉の皿におでんをのせる。

「……」

「……」

楠葉も、横の女も、無言で皿の前のコップ酒を見つめていた。

格が上がると変るもの。

それは、彼女たちもまた経験してきたことだ。

「俺は変わりたくない。その代償として、こんな老体にむち打つて、毎日屋台引きですわ。ははっ。でもね？この年になつて思つんですよ。お嬢様」

「？」

「変わることを受け入れても、拒んでも、でもね？入つて、気がつくと、どこかでかわっているんですよ。昨日まで何でもなかつた屋台引きが、今日には腰に辛いとかつて、ね」

「まあ、そんなものよ」

不意に、女が言った。

「人は変わつていく。変わるからこそ、前に進むものでしょ？」

「へへっ。俺にやあ、学がねえから、そんな難しいことはわからねえけど、お客様、外人さんなのに日本語上手いねえ」

「日本人の子に恋しちゃつてね？そりや、一生懸命覚えたものよお？でもさ。その子がさ？今日だつてベットの中までいつたのに、邪魔が入つてさ？もう散々。何のために日本語覚えたんだか」

「動機が不純すぎるって」

「あらあ？その年で浮いた話一つない方が問題じゃない？」

「いいわよ！もうこうなつたら独身一直線！親父が嘆こうが知つたことか！」

楠葉は豪快にコップ酒を空けた。

「おおーっ！」

女は無責任にパチパチと手をたたいて喜ぶ。

「や、あんたも飲みなさいよ。あんたの失恋記念に！ね？ナターチャ」

「……あんたもいつになつたわね」

「で、さあ」

飲み出しからしばらくの後、ナターチャは楠葉に訊ねた。

「噂、なんだけど」

チラリと主を見る。

「おじさんなら大丈夫よ」

楠葉は、なんでもないという顔で言った。

「元・近衛右翼大隊第一中隊長、祖父の上官だつた人よ」

「え？」

「へへっ。戦闘で右足亡くしましてね。当時の魔法技術では、騎士としてはお役に立てませんでした」

「あ…………そうなんだ。ごめんなさい」

「いえいえ。その後、饗庭様ん所の」厚意で足をいただきましてね。今ではなんでもないんですよ。ま、ただ、騎士よりおでんやの主の方が、性にあつてたんで、これだけはそのままですけど」

主は、苦笑混じりで、そう言いながらナターチャのコップに酒を注いだ。

「よかつたじゃない。でさ。楠葉、近衛がルシフールを探るつて噂、本当なの？」

「アトールには悪いけど、ウチは逆指名よ」

「ルシフールが？ もう騎士廃業とばつかり思つていたんだけど」

「そ。ただし」

楠葉は酒を飲みながら言った。

「学校への通学は最低条件。つまり、学校に行かせてくれるなら、近衛に入るつてさ。……ま、あの子、騎士じゃなければ、今頃、どんな人生歩んでいたのかしら」

「結構、いい人生歩んでいたんじゃない？ 体はかなりのもんだし。」

「オトコ作ってウハウハ」

「……あんた、結局、そこなのね」

「当然じゃない。それこそがオトコとオンナよ?」

「……どうせ私に縁ないわよ」

「ま、オンナをあんたが採用するつになら、オトコはもじつてい  
い?」

「だから断つたでしょ?」

「足りなかつた?」

「あんたね。非公式とはいえ、ン千億円払つから水瀬よこせつて、  
国としての常識疑うわよ?」

「メサイア何騎か建造予算パクればちよろいわよ」

「で、手に入れたら、どうするの?」

「もち、私専用のハーレム作つて」

「こら」

「いいじやない。あの子と私の愛の巣よ?あんた達、日英軍が期  
待したルシフェルと水瀬のカップリングより健全だわ」「ど  
こがよ!?」

「大人のオンナが少年を自分色に染め上げる……ね?」

「あんた、言つてることが犯罪だつて、氣づいてる?」

「ひつどいいいかたねえ。あーあ。私がもう少し若ければなあ

「私の方が年下だつて何度言えばわかるの?やめてよ。こつちま  
で老けてくるわ」

「戦争ばかりの人生じや、老けもするわよ」

「戦争中、成長したのはあの馬鹿息子くらいか」

「全然よ」

「したわよ」

「どこが?」

「内面よ」

「幼児化が進んでたわよ?あの、なんとか言つ女の子に半殺しに  
される位弱くつて」

「あの子は非常識あざらぬのよ」

「あの子、何者なの？」

「……不明。ただの子じやないから、調べがつき次第、近衛でど

ういづけるわよ」

「あの子、人質にとれば、悠理は言こなりつてこと?」

「あのね……」

「そつかあ」

「あんた、今、何考えたか言つてごらんなさい」

「やだ楠葉つたら!」

楠葉は、ナターシャが何を考えたのか、聞くことすら止めた。

「……まあ、ルシフェルに提示された条件、全部飲んだことだし。

あとはあの子次第ね」

「楽しい。反面、えらくトラブル続きの学校生活になつたね。

近くにいるのが悠理じや」

全くその通りになるのだが、今はここまで。

この一ヶ月後、ルシフェル・ナナリが来日することになる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7986z/>

---

過去と赤提灯と雑談と

2011年12月25日17時44分発行